観相から見る日本文学史の試み　序説

――特設コーナー展示資料解説から――

相田　満・高野（屋代）純子

要　旨

国文学研究資料館通常展示「書物で見る　日本古典文学史」の一角に設置している特設コーナーにて、平成二十六年一月二十一日から三月十日の間、本稿標題に掲げるテーマで観相に関する資料を紹介した。

これは、観相が人物・キャラクター造型に与えた影響の可能性を確かめるために、その営みの跡をとどめる文学・絵画、それに関連する言説や相書に残された記述の一端を示したものである。「観相」とは、人の身体・容貌・声・気色（オーラのようなもの）を観察して、その性質・禍福）を見通すことをいい、いわゆる人相見である。かつては、大いに普及していた知識体系が、文芸・絵画等の創作活動に影響を与えていたであろうことは想像に難くない。そこで、当該展示においては、観相書の記述と、その営みが、古典作品や記録、また様々な表現活動に及ぼした影響箇所の例示も試みた。本稿はそれを記録として残す意味でしたためたものである。

一、はじめに

国文学研究資料館通常展示「書物で見る 日本古典文学史」の一角に設置している特設コーナーにて、平成二十六年一月二十一日から三月十日の間、本稿標題に掲げるテーマで観相に関する資料を紹介した。これは、観相が人物・キャラクター造型に与えた影響の可能性を確かめるために、その営みの跡をとどめる文学・絵画、それに関連する言説や相書に残された記述の一端を示したものである。

「観相」とは、人の身体・容貌・声・気色（オーラのようなもの）を観察して、その性質・禍福を見通すことをいうもので、いわゆる人相見である。

観相を今風に評すると、「人間を観察する技術の精華」とでも表現できようか。現代はあまり一般的とは言い難くなった「観相」だが、今よりもはるかに占い師などが多かった前近代の社会では、観相をめぐる知識体系は、創作活動や創作物に少なからぬ影響を及ぼしていたようである。

人が人を認識した結果をどのように客観的に表現するか。的確に情報を読み取るための物差しや、その様態を伝達するための表現方法、その伝達媒体として使われる文字・音声などを使用した言語、絵画などの表現様式、さらには数値情報として計測・統計可能とする装置など、人間観察技術の向上ために繰り返されてきた人間の智恵の営みの歴史は長い。

日本の平安時代や中世には、観相の営みは、少なからぬ貴紳達の嗜みにもなっていた。そして、近世期には、大雑書のような日用百科書において欠かせない常連となるに及んでは、さらに広く庶民層へも浸透していったのである。

さらに、近代に入ってからの観相学は、二十世紀初頭に骨相学と融合することにより、欧米でも一時の隆盛は見たものの、科学的裏付けのあるものとの評価を得られることはなかった。そして今となっては、まさに、カルトと化した「忘れられた」学問といってよかろう。

しかしながら、かつては、これ程に一般化していた知識体系が、文芸・絵画等の創作活動に影響を与えていたであろうことは想像に難くない。そこで、当該展示においては、観相書の記述と、その営みが古典作品や記録、また様々な表現活動に及ぼした影響の一端も含めての例示も試みた。ただし、展示スペースが限られていたことと、通常展示とも重なる所も少なくなかったため、今回の展示は典型的な内容を示すにとどめた。

二、人相見の絵

① 源氏物語淡彩白描画
② 婦人相学十躰　浮気之相
③ 婦女人相十品
④ 人相見の図（仮称）

二-1、源氏物語淡彩白描画（国文学研究資料館蔵　ユ3-145-1）

導入として人相見の登場する絵を紹介する。『源氏物語』桐壺巻の高麗人の人相見が登場する場面である（図1）。

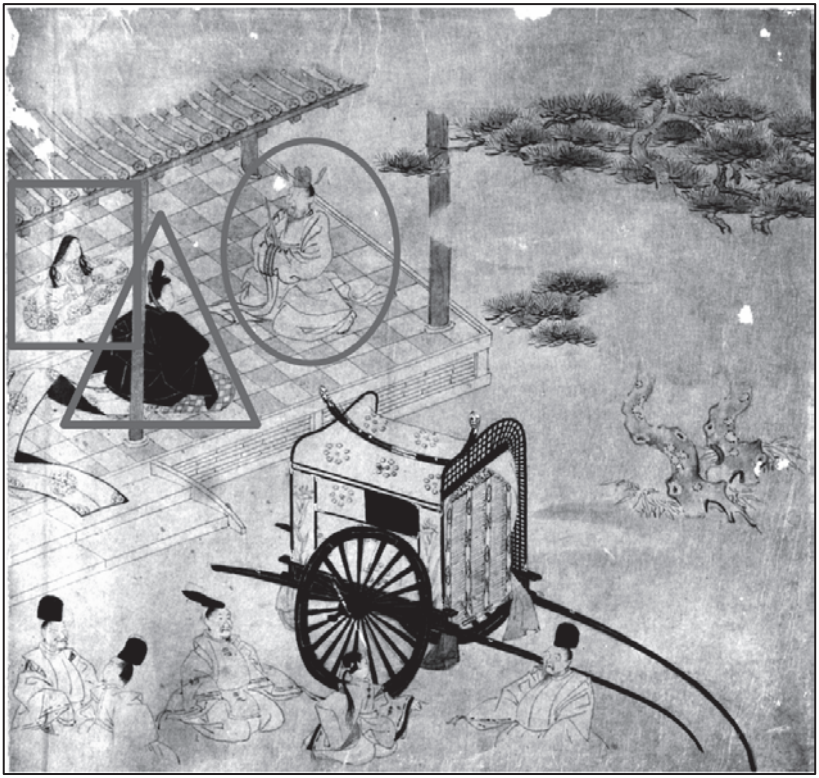


図１　源氏物語淡彩白描画

当時来朝していた高麗人（図中○印）に光源氏（図中□印）の相を身分を伏せたまま、後見人の右大弁（図中△印）の子のように思わせて鴻臚館で人相を観させた所、帝王となるべき相はあるが、そうすると国が乱れる、国の重鎮となる者として観ると、その相も違ってくるとの見立てであった。これにより、桐壷帝は、光源氏を皇族から外して源氏に下すことを決意する。

絵の詞書（図２）には次のようにある。

桐壷
いみしうしのひて
このみこを鴻臚館に
つかはしけり
御うしろみたちて
つかう

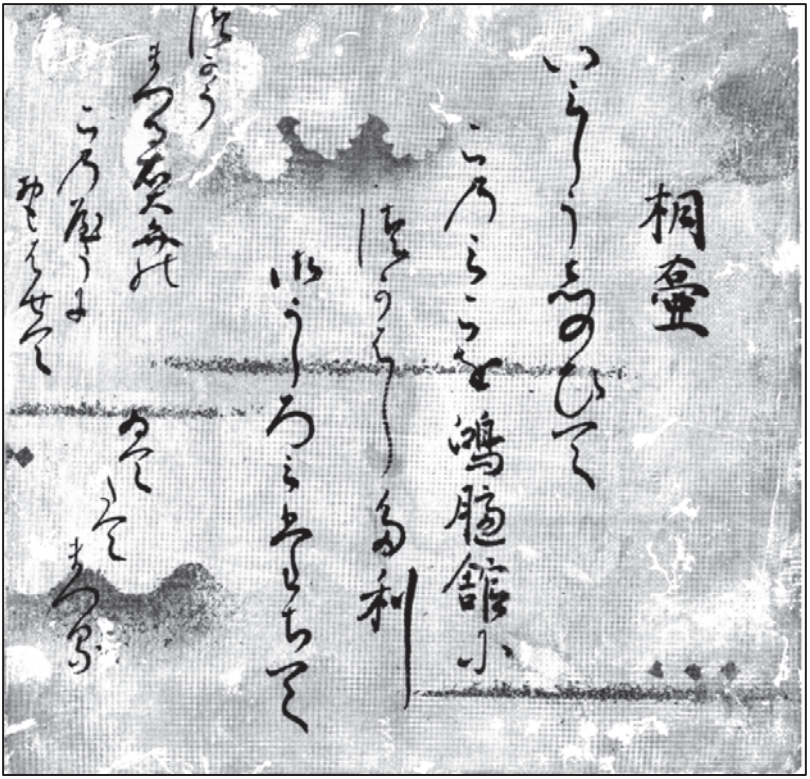


図２　源氏物語淡彩白描画（図１の詞書部分）

まつる右大弁の
　このやうに
　　おもはせて
　　ゐて
　　たて
　　まつる

高麗人とは、渤海国（ぼっかいこく）のこと。すなわち、もと高麗で朝鮮三国（百済・新羅・高句麗）の一つ高句麗国をさす。

渤海国とは二百年にわたる親密な国交が続いたが、その間も日本は渤海国を高句麗国の末裔であるという観念で付き合い、渤海という国号はついに定着しなかった。そのことは、渤海国との交渉が途絶えてたかだか百年程度しか経たないころの平安朝人が渤海国人との交誼を思い出す際には、必ず「高麗」という表現で現れることからもわ

王使高齋德等八人入京○丙申遣使賜高齋
德等衣服冠履渤海郡者舊高麗國也。淡海
朝廷七年冬十月唐將李勣伐滅高麗其後朝
貢久絶矣至是渤海郡王遣寧遠將軍高仁義
等二十四人朝聘而著蝦夷境仁義以下十六
人並被殺害首領齋德等八人僅免死而來
五年春正月戊戌朔廢朝兩也○庚子　天皇

図３　『続日本紀』巻十

かる。

『続日本紀』巻十（神亀四年十二月丙申（二十九日）〔七二八年二月十三日〕）に渤海国人がはじめて来朝した記事がある（図３）。その時に日本を訪れた一行は、自分たちをかつて交渉のあった高麗国の後であることを国書に記して国交を求めた。しかし、その渤海使一行は日本にたどり着いた際、緊張関係にある出羽の蝦夷側の境界線（図４）に飛び込んでしまった。さらに悪いことに、渤海国使が寧遠将軍高仁義を筆頭とする武官で構成されていたことも、蝦夷を刺激したようで、一行二十四人中十六人が殺害され、生存者八名という惨状であった。

『源氏物語』で描かれる人相見を行った高麗人の造型には、第九回渤海使の史都蒙と第二十五回渤海使の大使王文矩の投影がある。

史都蒙は、宴会に出席した眉目秀麗な橘清友に注目し、通事舎人の山於野上に、あの少年は何人かと問い、自分は相法をたしなんでいるが、この人は毛骨ただびとに非ず、子孫は必ず大貴となるだろうと言ったので、通事が命の長

図4　出羽の国（蝦夷側の境界線は秋田城付近）

短まで観ることができるのかと問うと、三十二歳に厄年があって、それを過ぎれば長生きするだろうと予言した。

清友はその後、田口氏の娘をめとり、嘉智子をもうける。しかし、三十二歳の年（七八九年）に、病を得て短い一生を終えた。しかし、娘の嘉智子は、その予言の通り嵯峨妃となり、檀林皇后と呼ばれることになる。清友の将来を予言し、しかもそれが的中した話は、史都蒙来日後七十三年を経た、嘉祥三年五月四日（八五〇年六月十七日）の嵯峨大皇太后（橘嘉智子）の崩御記事（『続日本後紀』）である。本来は大皇太后の死を報じるもののはずなのに、実際には父の橘清友についての観相譚に多くが割かれているのには、渤海使がよく人相を観るという風説がこのことから起こったことも与っているようである。

もう一人の王文矩は大使以前の時とあわせて三度の来日を果たしたが、彼は時康親王の人相を観て後に天皇になることを予言し、それが的中して光孝天皇となったことが、信仰のようになっていたものと思われる。それゆえに、『源氏物語』の中にも高麗人＝渤海使が光源氏の人相を観る場面となったのである。（上田雄『渤海使の研究』第三章補説17、明石書店、二〇〇二年）

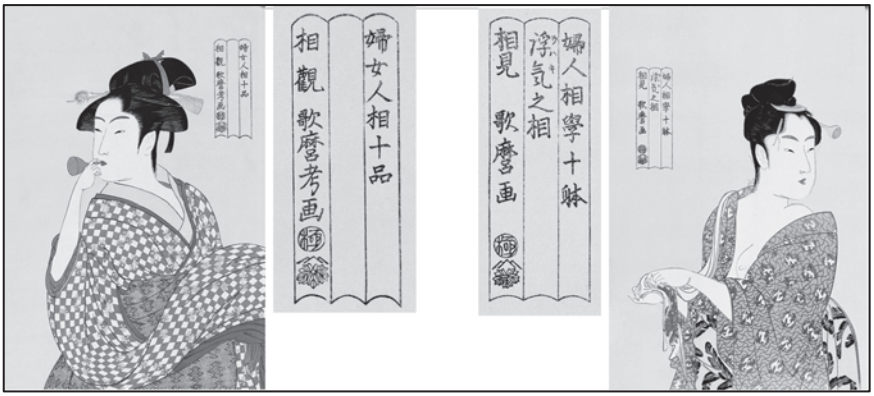


図５　婦人相学十躰浮気之相・婦女人相十品

二-２、婦人相学十躰浮気之相と婦女人相十品／喜多川歌麿

架蔵。喜多川歌麿(1753?-1806)の代表作ともいえる揃物である。大首絵と呼ばれる特徴ある美人画に気質の類型まで描き分けようとした。湯帰りの女が振り返った一瞬を描き、多情で浮かれがちな女の性格を写し出している（図５）。

「婦人相学十躰」に「浮気之相」という観相の標題を付したところ、相者関係者達からのクレームがあったために、次のシリーズの「婦女人相十品」では観相の結果を削除せざるをえなかったと考えられている。（『浮世絵大事典』「婦人相学十躰」の項、東京堂、二〇〇八年）

二-３、女人相見の絵（仮称）

架蔵。女人相見が江戸期にもいたことがこの絵からもわかる(図６)。女性と占術との関係は、シャーマンとしては卑弥呼の鬼道秦代末から前漢にかけて活躍した著名な観相師、許負など、古くから関係が深い。

三、日本で流布した中国由来の相書

①神相全編正義
②参考：秀雅百人一首
③袁柳莊相書・人相水鏡集・麻衣相法大全

三-1、神相全編正義

日本に現存する最古の相書は、金沢文庫蔵『集七十二家相書』である。七十二家の説を集成したかのような標題を持つ書ではありながら、名が現れるのは郭林宗・唐挙・龍泉などに過ぎない。しかし、他の相書と同様のことを述べる記載は多い。また、明代にそれまでの説を集大成した陳摶撰・袁忠徹校の『神相全編』には、達磨・許負の説を引く編が含まれるなど、観相の説は、大同小異を孕みながらも、継続性が保たれているのではないかと想起されるのである。

明版・清版の『神相全編』は九巻・十巻・十二巻で十～十二冊の大部なものだが、中国書が日本でまとめられた和

図6　女人相見の絵（仮称）

図７　『神相全編正義』

刻本や和訳本（通俗本）には三冊程度の簡約になったものが多い。和刻本の『神相全編』も同様で、和刻本は三冊の構成となっている。これには慶安四年（一六五一）刊本と『神相全編正義』と名付けられた文化二年（一八〇五）の刊になるものがある。

慶安刊本の、人相を「貴相」「威相」などの八相六面に分類した絵は、浅井了意撰の『安部晴明物語』に反映された。また、『神相全編正義』（図７）では、先の慶安刊本や中国刊本の誤謬を改めたほか、観相の書は医学に連なる人命に関わるものであるとし、読み間違いを防ぐために、「貌（ぼう）」字の略体「皃」を「皀」に、「光」を「炁」にするなど、わざわざ古字を使用し、漢字の読み方でも呉音を踏襲するなど、表記上でも注目すべき点が多い。人相の絵も五百羅漢の五十一幅を法華経の文字だけで描いたことで著名な加藤信清（遠塵斎）が、石龍子の監修を得て新たに書き起こしている。なお、昭和四七年刊の易学教科書と題する活字本注釈書後者は後者の『神相全編正義』に拠っている。

三-2、参考：秀雅百人一首／緑亭川柳、葛飾北斎等画

［当該箇所は一勇斎（歌川）国芳画］（国文学研究資料館蔵　ナ2-194）

図8　『秀雅百人一首』（左）千利休　（右）人物部分拡大図

緑亭川柳（天明七年〔一七八七〕～安政五年〔一八五八〕）の撰で、葛飾北斎・柳川重信・渓斎英泉、一陽斎豊国たち5名の絵師が腕をふるう。

『秀雅百人一首』（図8）は、歌のよしあしは二の次にして、祝儀性のある歌（めでたき歌）や、人徳のある人、貧しくとも雅趣に富んだ人だけを選んだというのである。そして、巻末の刊記によれば、選ばれた百人は、五人の画師によって20名ずつ、あたかも競作のように描かれている。その内訳は、次に示す通り。

画工	口絵及従一至十	前北斎卍老人
仝	従十一至二十	一勇斎国芳
仝	従廿一至三十	柳川重信
仝	従三十一至四十	渓斎英泉
仝	従四十一至五十	一陽斎豊国

当該画像は一勇斎（歌川）国芳画。弘化五年（一八四八）刊行。選ばれた歌人は祝部清風から中江藤樹までの百人。上段には各人についての略伝を掲載するが、千利休の絵は通常の絵と異なり、いかにも俗っぽい姿をしている。これは、肖像画家は観相をたしなむべしという中国古来の言を如実に反映した絵といえる。参考までに『神相全編』の「俗相」と比べていただきたい。

では、このような容貌が、どのように描かれたかを知るために、まず、その顔の拡大図（図8右）と、慶安四年（一六五一）の刊記を持つ慶安版和刻本『神相全編』と、加藤信清（遠塵斎）によって新たに描き起こされた人相の絵を有する『神相全編正義』（文化二年［一八〇五］序跋）（図7）に収められる人相図「八相六面図」を使用して照らし合わせてみよう。すると、「俗相」が最も類似していることが分かるのである。

しかも、その印象は背景に配された散らし書きの歌と併せて読むと、より強く伝わる。

釜一つ
　持てば
茶の
湯
　は
なる
　ものを
よろづの

道具好むはかなさ

本来は釜一つの道具だけで成り立つ、質素な茶の湯の道を理想と目指しながらも、現実は様々な道具好みに大金を費やすマネーゲームを演出せざるを得なかった自分自身を空しく儚いものと嘆いている。

また、頭書の略伝には次のようにある。

千の利休はじめは与四郎と云十七
才より道陳に随つて茶を学び名
を宗易といふ　茶の道とせる歌に
へ花を見て待らん人に山里の
　雪間の草の春を見せばや

此心をもつてすといへり　扨茶器のことは東山殿古器古画を好み給ふより價たかくなり又豊太閤の一奇器にして國郡も与ふべき功臣に千金の器物を給はりて人心を結ん為の謀事

なるに治世に成りても茶をするもの
奢にふけり金銀を費し得がたき道
具を求め或は其業ならぬ人も監
定にことよせこれをもて利をむさ
ぼるなど心さまよからぬ人も有古器は
貴きものと心得價のたかき器をあい
するは心利欲に走るがゆへ也缺たる
すり鉢にても時の間にあふを茶道
の本意とすとこの歌をよめり

補足を加えつつ内容を詳述しておこう。

千利休は幼名を与四郎といい、十七歳から茶を北向道陳（永正元年［一五〇四］～永禄五年［一五六二］）に師事して学び、法名を宗易とし、茶の道を伝えるものとして藤原家隆（保元三年［一一五八］～嘉禎三年四月九日［一二三七年五月五日］）の、次の歌を好んだ。

花をのみ待つらん人に山里の
雪間の草の春を見せばや（『壬二集』上　後京極摂政家百首）

「花の咲くことばかりを待ち遠しく思っている人に、山里の残雪の間に顔をのぞかせる、若草の春を見せてやりたいものだ」と、微細な兆しが伝える象徴的な美の意匠に茶道の本質を見ていたのであろう。

そもそも茶器は、東山殿と呼ばれた室町幕府第八代将軍足利義政が好んだことから、当時より古器や古画の価格が高騰していたが、豊臣秀吉の奇策とも言える施策により、国郡を褒賞として授ける程の勲功を挙げたを好んだ功臣に、千金にも値する茶器を代わりに与え、また、そのことにより人心を掌握することを行うようになっていた。その後、天下一統が成ってからも、茶を嗜む者は奢侈にふけり、金銀を費やして希少な道具を求めるようになり、専門家でもない者さえも、鑑定にことよせて、高価な物を売りつけて利をむさぼるような、心掛けの良くない者も出るようになった。こうなったのも、すべて古器が、その本質的な素晴らしさで判断されるのではなく、貴重で高価なものと思われるようになったために、利益を追求する欲心から愛好されるようになったためである。

欠けたすり鉢を使ってでも、その場の茶の湯席に間に合えば十分に事足りるものであることこそ茶道の本意であるのに、現実は空しく儚いものだ、という気持ちを込めたのが「釜ひとつ」の歌である。

本来ならば、欠けたすり鉢でも成り立つ茶道が、義政将軍の頃から古器、古物を好むようになって、道具に莫大な値が付くようになり、豊臣秀吉時代には、一つの名器が国郡にも匹敵するほどの価値を持つほどになった結果、大きく変質してしまう。いかに嘆いても、人心掌握のための道具として茶道が利用される限りにおいては、茶頭たる千利休も欲得絡みの世俗に深く関わらざるを得なかったのである。

『神相全編正義』巻中「人の八相を観る法（観人八相之法）」の俗相には、次のようにある。

俗とは、形貌昏濁にして、塵中の物のごとくにして、而して賤俗なり。縦（たと）ひ衣食有りとも、亦迦（なや）むこと多し。（俗者。形貌昏濁。如塵中之物。而賤俗。縦有衣食、亦多迦也。）

すなわち、俗相は、容貌が暗く濁っていて、塵の中のもののようで、しかも賤しい。たとえ、衣食が満ち足りていても、悩み事が尽きない相であると言っている。こうした風貌の像は、管見の限りにおいて他に類例を見ない。あるいは、苦渋に満ちた表情を表すために、鬚・眉を描いた可能性も考えられるだろう。

なお、千利休の当該画像は国文学研究資料館電子図書館の歴史人物（古典キャラクター）画像データベースから入手可能である。（参考：相田満「利休の顔（続）　俗相の利休―『秀雅百人一首』に収載される異形の利休像の観相的分析―」、『『茶譜』巻三　注釈』、大東文化大学東洋研究所、二〇一一年刊）。

三-３、麻衣相法大全／唐・鯉耀（りよう）撰・明・陸位崇（りくいすう）編（個人蔵）

三-４、袁柳莊相書／［明］袁柳莊著（写本は国文学研究資料館蔵　ヤ５-４９１）

三-５、人相水鏡集／右髻道人纂要（国文学研究資料館蔵　５４-３０３-１～５）

中国・台湾では『麻衣相法』と『柳莊相法』が頻用されるという。対して日本では、両書の和刻本は稀覯（きこう）本となっており、滅多に用いられない。図９『麻衣相法大全』は青山英正氏蔵本。図10の国文学研究資料館蔵『袁柳莊相書』は『柳莊相法』とも呼ばれる和刻本の写し。宝暦七（一七五七）年刊のものがある。大陸では、女性の人相は本書を基本とするという。

また、『人相水鏡集』（図11）は中国・台湾では『神相水鏡集』、『水鏡集』とも呼ばれる。第五冊の絵は慶安版の『神相全編』から採られた。

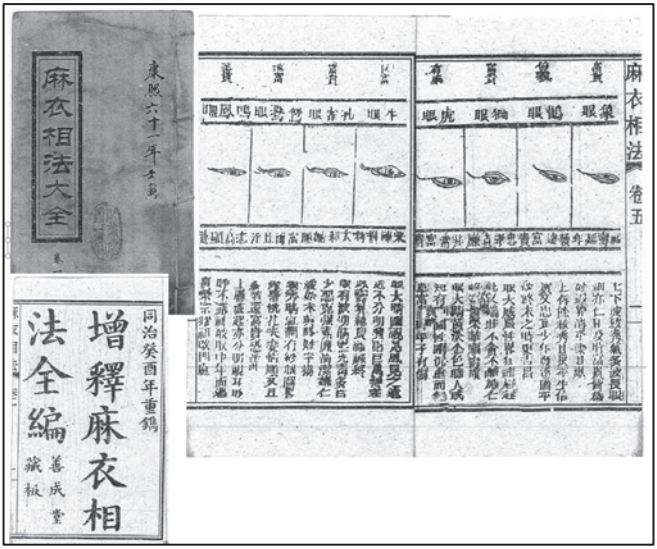


図 9 『麻衣相法大全』

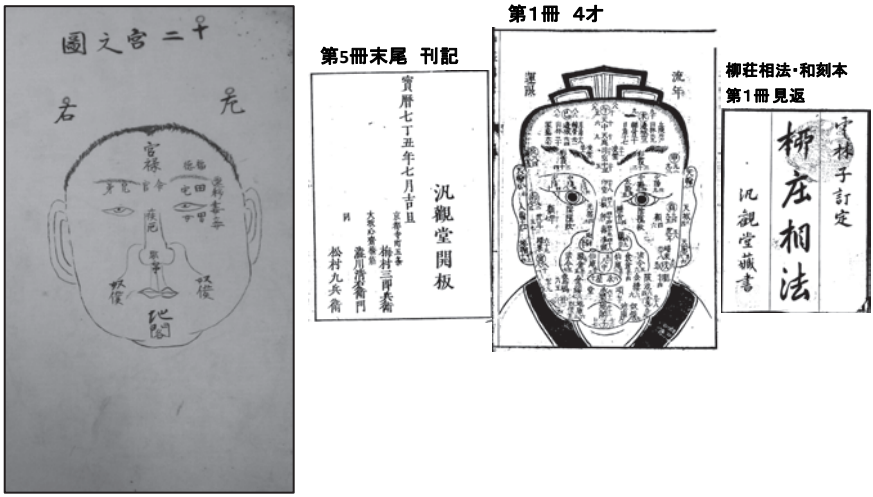


図 10 『袁柳莊相書』

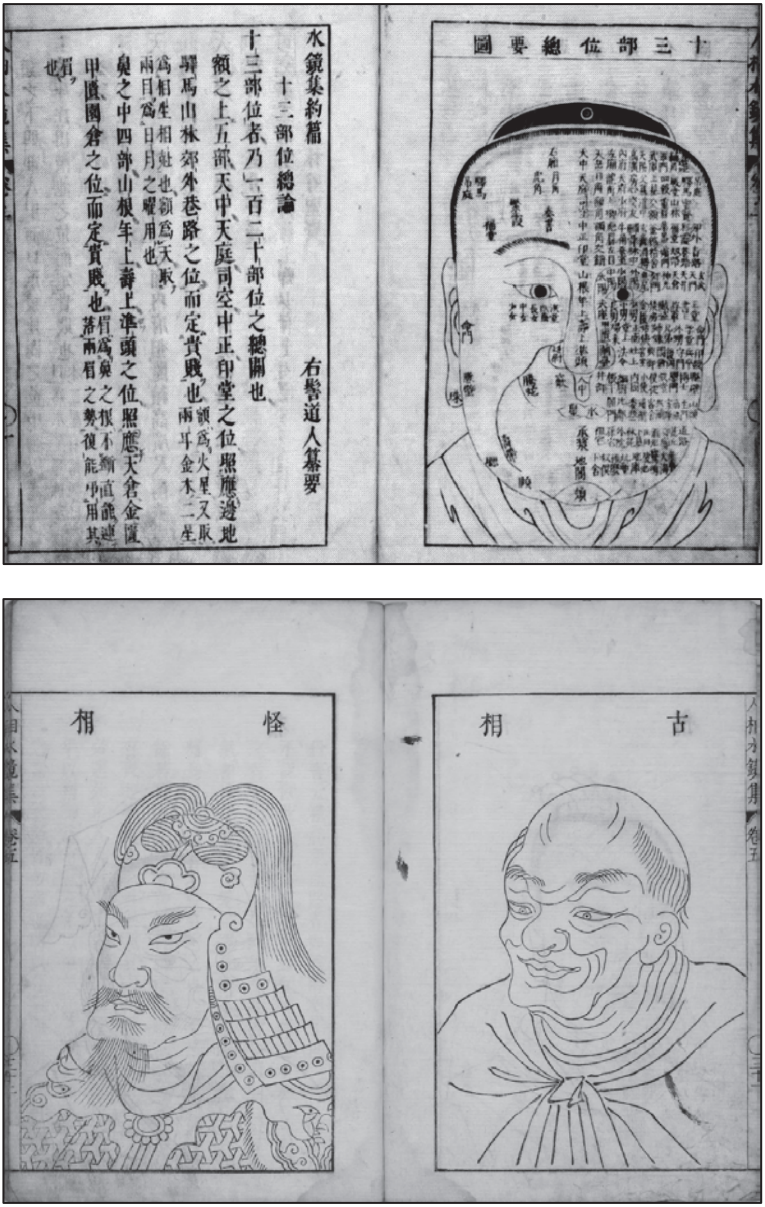

十三部位總要圖
水鏡集約篇
十三部位總論
右髻道人纂要
十三部位者乃一百二十部位之總關也
額之上五部天中天庭司空中正印堂之位照應邊地驛馬山林郊外巷路之位而定貴賤也兩耳金木二星爲相生相尅也額爲天取兩目爲日月之曜用也
鼻之中四部山根年上壽上準頭之位照應天倉金匱甲匱圓倉之位而定貴賤也相爲鼻之根不顯直能遮落兩眉之勢復能中用其相也
怪相
古相

図 11　『人相水鏡集』

四、近代まで続く観相の世界

①井上円了　『迷信解』
②永代節用無尽蔵
③人相千百年眼

四‐1、井上円了『新編妖怪叢書3　迷信解』昭和五八年十月国書刊行会（国文学研究資料館蔵　ム8‐34‐3）

大正五年（一九一六）一月五日に丙午（いご）出版社より刊行された『妖怪叢書第四編　迷信解』の影印復刻本である（図12）。これ以前に、明治三七年（一九〇四）九月十日哲学館より初版発行された『妖怪叢書第四編　迷信解』がある。本書の中で井上円了は、

骨相術は（中略）日本の人相ほどに甚（はなはだ）しからざるも其判断が餘り器械的にして、物差を以て精神を測るが如き有様なるは、笑ふべきの至りである、手相術は東西共に行はるゝも、是れ亦同様に信ずることは出来ぬ

と述べ、人の外貌から運不運吉凶を占う「人相」術を、道理に合わないものとして批判している。（この項、高野［屋代］純子執筆）

図 12 『迷信解』　（上）新編妖怪叢書 3　表紙
（左下）妖怪叢書第四編　表紙　（右下）『迷信解』第九段　人相家相及び墨色の事

四‐2、永代節用無尽蔵／河辺桑揚・堀源入斎、堀原甫（国文学研究資料館蔵　マ3‐95‐1～2）

「じいさんだけが見ていて他の者にはさわらせなんだ」
「町内でこれを持っていたのはウチともう一軒だけやったナ」
「祖父は村中の子供の名前をこれを使ってつけてました」

（横山俊夫「日用百科の使われ方」、静脩、三六‐二、京都大学図書館、一九九九年）

日用の百科全書ともいえた大雑書（図13・図14）は、息長く明治・大正・昭和まで刊行され、一家・一村の智恵袋的存在であった。

この種の典籍の存在は、台湾・中国などの東アジア全体に広く確認される。そして、現代でも新聞・雑誌に占いが必須であるように、人相占をはじめとする占いコーナーは欠かせない人気の記事であった。残存する典籍の占いコーナーの部分には、手垢・手ずれの跡が多く確認されている。

大雑書の末尾近くが占い部分であることから予想を立てて、分厚い大雑書の手擦れのあとを悉皆調査で画像を撮り、ヒストグラム（図14）で濃淡の分析をした研究は、人文学と情報学とが融合した斬新な発想の研究として二十世紀最末期の学融合的研究として話題を呼んだ。報告は横山俊夫・小島三弘・杉田繁治『日用百科型節用集の使われ方』京都大学人文科学研究所調査報告第三八号（一九九八年）に掲載されている。

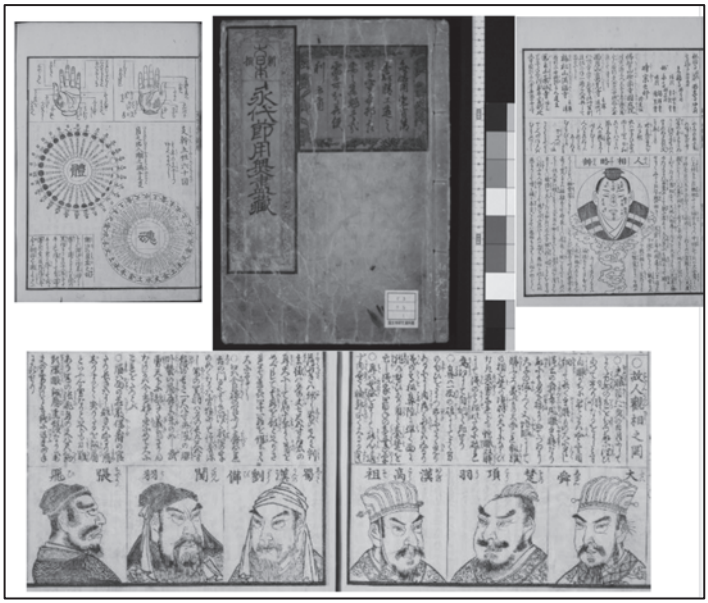


図 13　『永代節用無尽蔵』

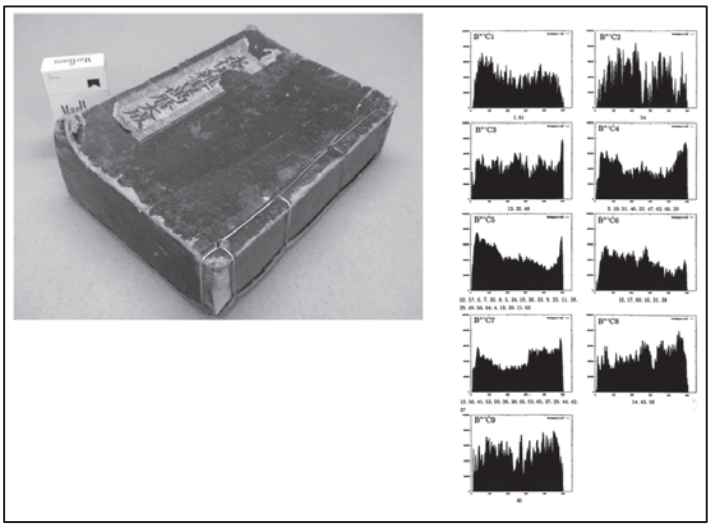


図 14　（左）『明治補刻　永代大雑書万暦大成』（個人蔵）、（右）ヒストグラム

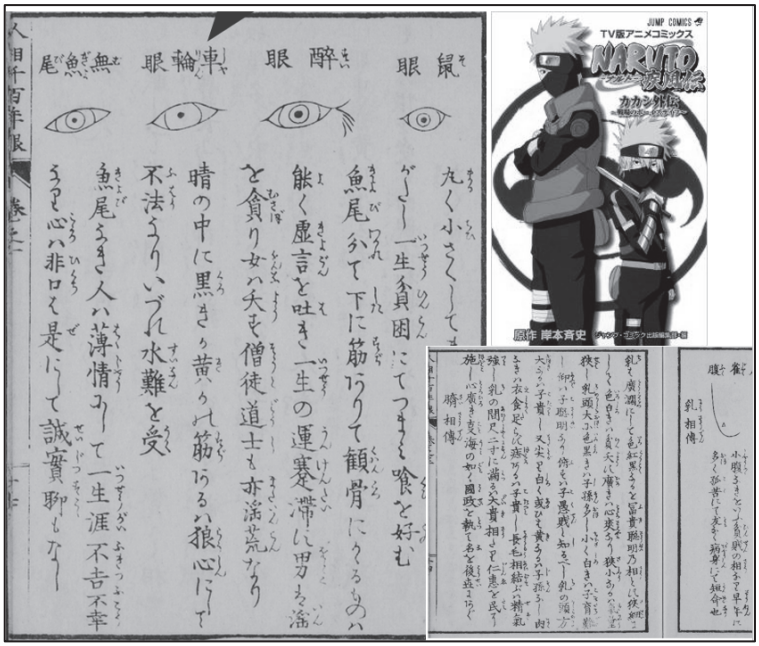


図 15　（左）（右下）『人相千年百眼』
（右上）『NARUTO』（©岸本斉史 スコット／集英社）

撰者の平沢白翁は江戸時代後期大阪の易学者。嘉永四年（一八五一）刊『人相千百年眼』のほかに『宅方明鑒』『家相千百年眼』などがある。本書は近代に入っても版を重ねられ、臍や尻、性器に至るまで細かな部位にわたる相をわかりやすく説く。

なお、掲出の画像巻之一　16ウ～17オは目の相を述べる部分だが、そこに記される「車輪眼」は忍者マンガ『NARUTO』で有名な「写輪眼」を連想させる（図15）。観相の世界は『正忍伝』のような忍術書にも及んでおり、類縁性もあながち否定はできないだろう。

五、著名な人相見のはなし　――聖徳太子・鈴鹿翁・水野南北――

①聖徳太子伝暦補注
②神相全編（慶安４刊版）
③本朝神仙伝
④南北相法
⑤神坂次郎『だまってすわれば　観相師水野南北一代』

五－１、聖徳太子のはなし　聖徳太子伝暦補註／五天良空（国文学研究資料館蔵　ヤ２－１６８－１～１０）

平安時代前期の歌人藤原兼輔（877–933）撰とも、その書名に古くから「平氏撰」といわれることから、平基親・平季貞・葛原親王などを撰者に擬する所伝がある。『聖徳太子平氏伝』とも称され、延喜十七年（九一七）成立の編年体の詳細な聖徳太子の伝記に注を付けた書物である。

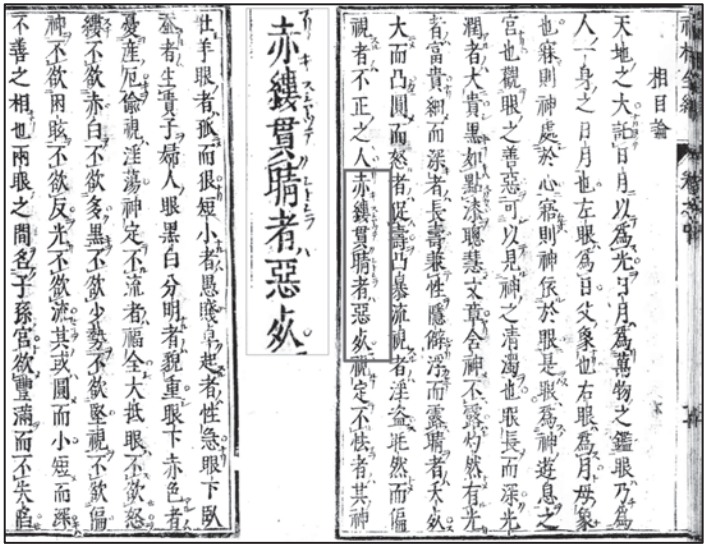
本書にある「崇峻天皇元年（五八八）戊申春三月」の記事の部分に、「赤文眸子ヲ貫ク傷害ノ相ト為ス」と記載されている（図16）のは、聖徳太子が崇峻天皇の目に赤い筋が走っているのを観て、崇峻天皇の身に危険が及ぶことを予言したもの（巻之四、３ウ）。それに対して、五天良空は、本書の注釈書で、『神相全編』を引いてその正しさを説いている（巻之四、７ウ）。

『聖徳太子伝』の記述によれば、聖徳太子は、日本で最初に観相を受け、最初に観相を行った人物であったため、日本の観相師からは今なお「観相の始祖」と仰がれている。図17は『神相全編』の慶安刊本の当該出典部分を示したものである。

『聖徳太子伝暦』の聖徳太子が観相する場面。

『聖徳太子伝暦』補註の『神相全編』を引いた部分。

図 16　『聖徳太子伝暦補註』



相目論

天地之大記日月以爲光日月爲萬物之鑑眼乃爲人一身之日月也左眼爲日父象也右眼爲月母象也寐則神處於心寐則神依於眼是眼爲神遊息之宮也觀眼之善惡可以見神之清濁也眼長而深光潤者大貴黑如點漆聰慧文章含神不露灼然有光者富貴細而深者長壽兼性隱藏浮而露睛者夭死大而凸圓而怒者促壽凸暴流視者淫盜眶然而偏視者不正之人赤縷貫睛者惡死視定不轉者其神性手眼者孤而狠短小者愚蹇急起者性急眼下臥蠶者生貴子婦人眼黑白分明者親重眼下赤色者憂產厄偷視淫蕩神定不流者福全大抵眼不欲怒縷不欲赤白不欲多黑不欲少勢不欲堅視不欲偏神不欲困眩不欲反光不欲流其或圓而小短而深不善之相也兩眼之間名子孫宮欲豐滿而不失皆

赤縷貫睛者惡死

図 17　『神相全編』

五-2、鈴鹿翁のはなし　――本朝列仙伝／田中玄順（国文学研究資料館蔵　ヤ1-139-1～4）

図 18　『鈴鹿翁』第二冊六オ

貞享三年（一六八六）の刊行、田中玄順の編集（図18）。田中玄順は、本書で、院政期に大江匡房の手により編纂された『本朝神仙伝』に登場する神仙たちのほかに、独自に選んだ神仙を加えている。『本朝神仙伝』以外にも、柿本人丸、小野篁、在原業平などの俗人まで仙人としているのが特徴的である。

本書に登場する鈴鹿翁（図の丸囲部分）は、吉野に隠棲した大海人皇子（後の天武天皇）に「帝王の気」があることを観て、皇子を仙郷に誘なって娘と娶せる。林羅山『本朝神社考』に同話がある所から引いたもので、聖徳太子の観相のはなしと併せて、日本の観相の始まりとして著名である。

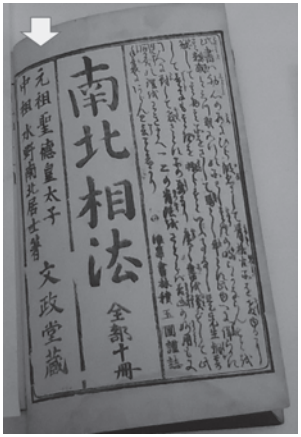


図 19　『南北相法』

個人蔵。水野南北（宝暦十年〔一七六〇〕～天保五年〔一八三四〕）は、江戸時代中期の観相学の大家で、当時、日本一の観相家といわれた。『南北相法』（図19）の扉に聖徳太子の名があるのは、当時の観相家達が聖徳太子を「観相の始祖」と仰いでいたからである。南北は若い頃は酒とばくちと喧嘩に明け暮れる日々だったが、易者に険難の相と死相が出ていると言われて観相に開眼し、自らの相を変えた。また、食事を慎ましくする「節食開運説」を唱えた人物でもある。その生涯は神坂次郎『だまってすわれば』（図20）にくわしい。

図 20　『だまってすわれば　観相師・水野南北一代』

六、おわりに

本稿は、一般にはあまり馴染みのない「人相見」「観相」が、古代から現代まで、日本文学や東アジアの諸学の世界といかに深いつながりを持っているかを当館の特設コーナーにて示したものである。観相の膨大な知識体系を説明し得るものではないことを御寛恕願いたい。

本稿の執筆に先駆けて、特設コーナーでの展示のために展示パンフレットを作成していただくなどお世話いただいた管理部総務課企画広報係の皆様に感謝申し上げたい。本図版も当該係の加工・制作による所が数多くあることを明記しておく。また、図版の掲載に格別のご配慮をいただいた、明星大学の青山英正先生、©岸本斉史 スコット／集英社にも記して深謝申し上げたい。

なお、本研究は JSPS 科研費 15K12853，23240032 の助成を受けたものである。あわせて深謝申し上げる。